今日は家庭教師の日。
勉強が嫌いな僕ですが、僕はこの時間がとても好きです。

「あら…またここ間違えちゃったの？ゆう君」

「あっ…ごめんなさい」

「焦らなくていいのよ？しっかり問題を見直していきましょう」

「うん。わかった」

先生の名前は雪子。
僕は雪子お姉さんに、ひそかに好意を持っています。

実は雪子お姉さんは、僕のお父さんの弟のお嫁さん。
つまり、僕の叔母なのです。

僕は学校の成績がとても悪かったので、お父さんが
学校の先生の免許を持っている雪子お姉さんに
家庭教師を頼んだんです。

雪子お姉さんはとても美人で、優しくて。
そしてスタイルも良くて…おっぱいがでかいです。
それに、なんとなく亡くなったお母さんに似ています。

雪子お姉さんの期待に応えられるように成績を上げなくちゃいけないなと思うけど、成績が上がっちゃったら雪子お姉さんが家庭教師をしてくれなくなるんじゃないかと少し心配しています。

でも、多分そんな心配するまでもなく僕は成績が上がらないような気がします。だって近くで教えてくれる度に雪子お姉さんの胸が背中に当たってるんですから。

その事で僕はいつもドキドキしてお姉さんのおっぱいのことばかり考えてて正直勉強どころじゃありません。

僕は雪子お姉さんが帰った後、いつもオナニーをします。
もちろん、オカズは雪子お姉さんです。
今日の雪子お姉さんのおっぱいの感触を思い出しながら
いつか僕にエッチなことをしてくれないかなと妄想して
何回も射精しています。

数日後―

今日僕は、雪子お姉さんの家に招待されることになりました。
いつも勉強で頑張っている僕に、たまにはご馳走をしたいと
呼んでくれたのです。
それに、今日はお泊りです。
僕は今日が来るのをとても楽しみにしていました。

雪子お姉さん達の家には子供はいません。
結婚して何年か経つのですが、
なかなか子供が出来ないんだとお父さんが言っていました。

「さあ。遠慮せずたくさん食べてね？ゆう君」

「うん、ありがとう。雪子お姉さん。いただきまーす！」

雪子お姉さんの料理はとても美味しいです。
僕もこんなお嫁さんが欲しいなぁ。
叔父さんがとても羨ましいです。

「おいしい？ゆう君？」

「うん。すっごく美味しいよ！」

「良かった。喜んでくれて。おかわりもたくさんあるからね？」

「うんっ！」

その夜。僕は衝撃的な場面を見てしまいました。
それは、僕が夜中にトイレに行こうと
廊下を通りかかったときです。

「雪子、いいだろう？ほら、早く脱げよ」

「ダメよ、あなた…あ…あ…んっ…」

女の人の声が、寝室のほうから聞こえてくるのです。
僕は童貞だけど、エッチな動画をよく見ているので
すぐに喘ぎ声だと分かりました。

僕は気づかれないようにそっと寝室に近づき、部屋のドアをかすかに開けました。
パン♡
パン♡
「ほら、もっとケツを突き出せ」
「…だめ…っ…！あっ…今日はゆう君が…んっ…来てるのに…っ…！
（もう…前戯もなしにいきなり挿れるなんて…乱暴なんだから…）」
あっ♡
「旦那が仕事から帰ってきたんだぞ？それに今日は溜まってるんだよ。その相手をするのが妻の役割だろう？」

「でもっ…んっ…！ゆう君に…んっ…見られたりしたら…
（最近こんなのばかり。私の都合も考えないで、
人をモノみたいに扱って…）」
パチュ♡
パチュ♡
「へへ、大事な可愛いゆう君に
雪子お姉さんのこんな
いやらしい姿を見られたら
お姉さんとしての威厳が
損なわれちゃうか？
んー、先生？」
ん♡
「あっ…そんな…んっ…意地悪言わないで…
（デリカシーもないし…私、どうしてこんな人と
結婚したんだろう？）」

叔父さんが、雪子お姉さんのオマンコにオチンチンを挿入しています。

パン！

パン！

パン！

つまり僕は今、二人のセックスを目の当たりにしているのです。

信じられない光景に僕は興奮を隠せず思わず声を漏らしそうになりました。

「あんっ…あんっ…あんっ…！」

あっ♡

雪子お姉さんって、あんなにエッチな顔するんだ…。あんなエッチな顔、僕に見せてくれた事なかったからなんか嫉妬しちゃうなぁ…。

「くっ…！ほら雪子。中に出すぞっ！」

ゼュルルッ！

ビクッ

ビクッ

ビクッ

「あっ…んっ…！
出して、貴方…あ…ああっ……！」

あぁん♡

パンパンと最後に大きな音を立てて、2人は激しく震えています。叔父さん、雪子お姉さんのオマンコの中に射精したんだ…。

「んっ…んんんっ…！」

ビクッ～！

ビクッ～

ビクッ～

すごい…雪子お姉さん…
ビクビク痙攣して
とても気持ち良さそうにしてる…。

あぁ…こんなの見てたら
僕の我慢汁がいつの間にか
すごい事になってるよ。

今すぐオナニーして射精したいよ…。
雪子お姉さん…雪子お姉さん…。
僕、今夜はオナニーのしすぎて眠れなくなっちゃうよ…！

その数日後。また家庭教師の日がやってきました。

「あら…どうしたの？ゆう君。こんなに間違えて…。この前まではここの問題、全部解けてたのに…」

「うん…」

「ここはね、この公式を使って…こういう風にするのよ？」

「うん…」

お姉さんは一生懸命、僕に勉強を教えてくれます。
でも僕は、あの夜の衝撃が強すぎて
お姉さんの顔を全然見られませんでした。

「それじゃあ、もう一度解いてみて？」

「うん…」

もう全然集中できないよ。
今日までにあの夜のお姉さんの事を思い出して
何回抜いたか分からない…。
それに今日も背中が胸にあたるし…僕もう我慢できないよ！

あっ…だめだ…妄想が抑えられなくて、勃起しちゃってる…。
うぅ…お姉さんにバレちゃう…抑えなきゃ…。
違うこと考えて落ち着かせなきゃ…！

「どうしたの？ゆう君。具合悪いの？」

「う、ううん…大丈夫…」

「さっきから下向いてずっと辛そうにしてるけど…
もしかしておなか痛いのかな？」

「…あ」

雪子お姉さんが背後から僕のお腹をのぞきこんだ時、
そう短く息をこぼしました。
やばい…見られちゃった。

「ゆう君……どうしてこんなになってるの？」

「ご…ごめんなさい。
実はこの間の夜、雪子お姉さんと叔父さんが
エッチしてる所を見ちゃって…
それでずっとそのことを考えてて……」

「……見ちゃったんだ」
お姉さんが元気なさそうな様子で答えました。
やっぱりお姉さんを幻滅させちゃったかな？
「…ごめんなさい！見るつもりはなかったけど、
僕…お姉さんのこと好きだし…それで…」
「ありがとう。でも、ゆう君が謝ることはないわ。
謝るのは私の方よ」
「えっ？」

「私はゆう君の成績を上げるために家庭教師をしているのに、逆にゆう君を勉強できなくさせちゃうんだから…。私、家庭教師失格ね…」
「そんな、雪子お姉さんは悪くないよ……」
「…でも私は、どうしてもゆう君に成績が良くなってほしいの…」
「えっ…？」

お姉さんは突然、僕の下半身をさわさわと触り始め、そして僕のズボンのチャックを開け、硬くなったオチンチンを取り出しました。

「お…お姉さん？」

「辛いでしょう？今勉強に集中できるようにしてあげるから（やだ、私…ゆう君に何してるんだろう…）」

「えっ…？」

そしてお姉さんは僕のオチンチンの竿を握りました。僕の頭の中はパニックになっています。夢でも見てるのかな？

ぎゅっ♡

「元気なオチンチンね…（すごい…見かけによらず、すごく大きなオチンチン…。旦那のより大きいかも…）」

お姉さんは僕の勃起したオチンチンの先端をその綺麗な指で触り始めます。

「ふ…あっ！」

「ふふ…ここが気持ち良いのね？（やだ…ゆう君、可愛い声…。私、本当はゆう君みたいな可愛い子が好きなのよ。…そんな声で泣かれちゃったら私も興奮しちゃうじゃない）」

お姉さんは慣れた手つきで僕のオチンチンの先っぽをにゅるにゅるとなぞり始めます。
こんな気持ちいいの初めてだ…！自分でするのと全然違うよ…
「あっ…あっ…でる……！」
『いいよ…。このまま出して…？』

「ううっ！」
今日もすでに3回抜いたっていうのに、
お姉さんの手があまりにも気持ちよくて、あっという間に射精をしてしまいました。
「あっ…！すごい…（やだ、手からこぼれちゃう…）」
「あ…あ…」
びゅるっ
びゅる。

「すごい…いっぱい出たね。やっぱり若いわね、ゆう君は…（本当にすごい量だわ…。それに濃厚…。こんなの膣内に出されたら、いくら私でも妊娠しちゃうわよね…）」

お姉さんが僕のおちんちんの先っぽを優しく搾り、オチンチンについた精液を綺麗な指ですくい取ります

「う…うう…」

「どう？これで集中できそう？（ダメ…私がエッチな気分になってきちゃった……。今度は私が集中できるか心配だわ…）」

「う、うん。…でも僕、もっとして欲しいよ…」

「ダメよ。ゆう君を甘やかさないって決めてたもの。今日は特別よ？」

「そんな…もうしてくれないの？」

「（もう…そんな子犬みたいな顔して…かわいいんだから…）
……誰にも言わないって約束できる？」

「うん、言わないよ。絶対！」

「いい子ね。…それじゃあ、ゆう君がもし次のテストで
90点以上取ったら…ね？（何言ってるんだろう
私、こんなこと言って……。
でもゆう君の顔とこの立派なオチンチン見てたら、ちょっとして
あげたくなっちゃうの…。エッチなおばさんでごめんね…）」

「ほ…本当？」

「約束よ。だから、勉強を頑張りましょう？」

「はい！」